

オンライン講座 日本史をにぎわせた女性たち II

テーマ : 「波乱万丈平安女性の一生 伊勢」

日時 : 2022年 5月 10日

講師 : 林 和清 先生

当日参加受講生: 20名 (在籍 30名) 再視聴あり

講義開始前に第1回「小野小町」について寄せられた「今日のひとこと」のいくつかを紹介いただき、加えて質問にもお答えいただきました。

Q: 小野小町はどうして小町と呼ばれたのでしょうか？

A: 姉が先に宮中に上がり、小野の町さま(お妃)とよばれていたため、後に続いた妹は小町と呼ばれたのでは？と思われます。(他数件の質問・回答がありました)



今回の「伊勢」は紫式部から最も尊敬された平安の女流歌人で、源氏物語の文中には 24 首が引用されています。

百人一首 難波がた 短かき蘆の ふしの間も逢はでこの世を すぐしてよとや 伊勢

あんなに短い蘆の節の間のようなほんの少しの時間を理解できるよう、実際に淀川へロケに行かれた様子が紹介されました。今より自然が身近にあり、草花や季節の移ろいなどに託した思いはより細やかだったと思われます。(右上写真)

伊勢は生涯に三度、もう死んでしまいたいと思うような悲劇に見舞われますが、そのたびに悲劇に屈することなく立ち上がります。歌人として、琴の師として宮廷の内外で才能を開花させました。

一度目: 16歳で初恋に破れたうえ、その時代の大将の婿になった元恋人から心無い歌を送られる。

傷心を抱え吉野の古寺を巡った後、再度宮中に上がり、仕事に打ち込むことを決める。

身もはてず空にきえなでかぎりなくいとふ 憂き世に身のかえりくる (もう一度生きてみよう、という再生の歌)

二度目: 宇多天皇との間に生まれた皇子を7歳で失い、自身の悲しみは大きく、周りの人々をも落胆させてしまう。

三度目: ひと回りも年下の親王との間に3人の子をもうけるが、息子二人は幼く亡くなり、親王も44歳である世へ。

かなしさぞまさらにまさる人の身におおかる涙なりけり (悲しみの涙がながれ涸れることはないという歌)

後に優れた歌人に育つ娘「中務」、孫「井殿」との女性三人の穏やかな暮らしを経て、伊勢は晩年に出家します。出家先の寺院が高槻にある伊勢寺です。こちらもロケシーンで見せていただきました。高槻という本当に身近なところに「伊勢」のお寺があるのかと、驚きました。駅からの地図も示していただきましたので、講義後にぜひ訪ねてみようと思われた受

講者が多くおられたようです。(左下 写真)

《今日のひとこと (一部)》

- ・資料の写真、ロケ録画でより理解が深まりました。
- ・伊勢は聡明で気丈で、現代でいうスーパーキャリアウーマンという印象。考えがしっかりしていて自立していますね。
- ・歴史・背景とその人物の人生を重ねてお話しいただくのは大変なことだと思いますが、とてもわかりやすく面白いです。
- ・流されているようで、歌の力で生きていったこと、立派です。

(担当 口村)

